

## 実務表現「の」と「と」

2009.04.22 (水) 第3限 教場 1-201

## 02の講義内容 書く技術 原稿用紙縦書きの意味

日本語の文字ひらがな…「の」と「と」

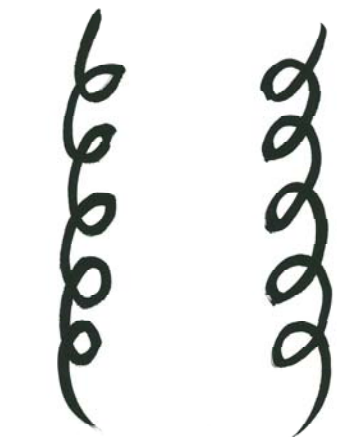
石川九楊著『書字ノススメ』〔新潮文庫より〕

タイトルというのは、書き手にとつても、編集者にとつても、頭を悩ます難問だ。

近年の軽い本はともかく、本の題名で圧倒的に多いのが、『風土』『共同幻想論』というような漢字だけで成立するもの。また仮名交じりとなると、九鬼(くき)周造の名著『いき』の構造のように、書棚を見わたすと「の」のつく題名の書物が多い。次いで多いのが「と」。評論家・埴谷雄高(はにやゆたか)の著書には、『鞭(むち)と独楽(こま)』『毘(わな)と拍車』などに、「の」と「と」がつく。政治学者・丸山真男(まさお)の『現代政治の思想と行動』のように、「の」と「と」の組み合わせもけっこう多い。朝鮮人の姓は「朴さん」「李さん」「金さん」が多くて、まぎらわしくないのだろうかと思うが、外国人には、日本の書物の「の」と「と」の文字が目について仕方ないのではなからうか。

この事実から見る限り、日本語では、助詞「の」もしくは「と」で二つの名詞を関係づけることによつて、最小限の宇宙を表現できるようだ。だとすれば、「の」と「と」は、他とは較(くら)べものにならぬほど重要な助詞であり、これらの中に日本語を解く鍵(かぎ)が隠されているはずだ。

ところで、毛筆で仮名文字を勉強する場合、まず右回転、左回転の運筆を練習する。はじめのうち、筆をおしつけて、ぎこちない筆あとの円を連ねるだけ。



やがて、右回転では、右上から左下へ進む時に力を加え、左回転では、左上から右下へ進む時に力を加えることを覚えると、筆先がきれいに回り、速く、滑らかに書けるようになる。この右回転から生まれるのが、「ののの…」であり、左回転から生まれるのが「ととと…」である。言語学的分析からの「の」と「と」が対をなす関係にあることが導き出せるかどうか知らないが、書学的には、「の」と「と」が対をなす助詞であることに気づかされる。

いうまでもなく、「の」は漢字の「乃」から、「と」は「止」から生まれた。「乃」と「止」の原形からいえば、もつと違った仮名文字の姿になってもよかった。事実、中国のくずし字(草書)の「止」は、左側の縦画から始まり、「心」の第一画を消し去ったような姿に書く。中国式筆順は日本語の「と」には似合わなかったものと見えて、「止」の日本流は中央縦画から書く。

現在の言語学者やデザイナーは、文字を言葉の記号図形とも考えているようだが、文字は決して記号図系ではない。意味を含んだ書字の力や深度や速度、角度(筆蝕(ひっしょく))が統合されて字画となり、その字画が筆順によつて組み立てられて、文字と文つまり言葉を形成する。そのため、文字の形と呼ばれているものの中には、印刷文字ではとうていすくいきれない微細な意味が、その書きぶりである筆蝕としてぎっしり詰まっている。

さて、回転部が書き出しの起筆部を包み込み、右下から左下への進行時に力を加え、内側へ巻き込んでいく右回りの「の」は、包み込むように接続する意味をのせている。書字から見れば『いき』の構造』とは、「いき」——その「いき」が「構造」に巻き込まれるように接続する意味している。風呂敷(ふろしき)に包まれるように関係するのだ。その包みをどんどん重ねていけば、若山牧水の「かんがへて飲みはじめたる一合の二合の夏の夏のゆうふぐれ」のような風呂敷歌が生まれる。余談だが、風呂敷助詞「の」の好きな日本人はまた無類の包装好きでもある。

つながりのないような名詞でも、「の」はやすやすとつないでくれる。それどころか「が」の「代用」さえする。女性の手紙の、「のしこ」と見まがうばかりの「かしこ」は、「の」と「か」の深い関係を明らかにしているようにも見える。

また、第一筆記筆部を突き出し、左上から右下への進行時に力を込められる左回りの「と」は、外部へはじき出す意味をこめている。「の」のように率直に連続する筆触ではなく、へたをすると、右上方へはねとばされて、途切れがちになりかねない。『鞭と独楽』という書名は「鞭」から「独楽」がはじけ出た状態を意味する。喩(たと)えれば、「鞭」という風呂敷を開けてみたら「独楽」が出て来たというあんばいだ。その結果、「鞭」と「独楽」とは、並立、対立した姿で、われわれの前に立ち現れてくる。

「の」——それは発展的、開展的ではあるが、また同一化が避けられない同化助詞である。「と」——それは同化できないものの排除の意味合いを含んでいる。へたに使うと、村八分助詞になりかねない。

本の題名から見る限り、日本語では同化と排除が関係を律する根本的な原理といえそうだ。現在の与党は「の」によって集まったのであり、共産党は「と」によって最初から排除されている。味方か敵か、地元か他所(よそ)か、日本人か外国人かを、まず明らかにしないではおられぬ原理が日本語の根底に横たわっている。

日本語とは、「の」である。あるいは「の」と「と」である。しかし「の」と「と」の複雑な中間の不在が大問題なのである。

「タイトルというのは、書き手にとつても、編集者にとつても、頭を悩ます難問だ。」と云う書き出しで始まる「の」と「と」と題する一文を上記に示し読んでみた。書物の題名には、この「の」と「と」が多いという。この著者石川九楊さんの書物の題名も『書と文字は面白い』『書字ノススメ』と「の」「と」である。実際、『日本の書物』『日本の名筆』『オタミベンベの言語学』にはじまり、マンガの『火の鳥』とその書名を「の」で繋いでいる。また、「これから出る本」[2007.04下期号]の書名『自我と生命』『地獄と極楽』『生死と仏教』『死と弔い』『憲法と議会制度』『憲法と地方自治』『国民道徳とジェンダー』『司法権と憲法訴訟』…と云った具合に暇無く刊行されているのである。

『美のゆくえ』『菩薩の願い』『起源の日本史』『近代日本の日用品小売市場』『清代中国の地球支配』『歴史の旅』『地図出版の四百年』『近代日本地方自治の歩み』『刑事訴訟の目的』『現代の国際安全保障』『政治防衛論の基礎』『地球時代の憲法』…とある。

混用型の『ヒトの機械のあいだ』『声と顔の中世史』『高野山の歴史と秘宝』『ロシアの連邦制と民族問題』『アジア太平洋諸国の収用と補償』…とある。

慥かにこのように日本における書物の題名には、「の」と「と」が多いことに気づくのである。英語のアルファベットは文字数は少ないが、その単語構成は実に複雑である。漢字は扁旁冠脚を巧に操ることでそれぞれの意味を伝える働きを有しているため、視覚イメージで意味を捉えていくことが可能な文字でもある。これを横に表示してみても読む上ではさほど問題はなからう。

例えば、江戸時代に発刊された『小野篁哥字尽』[「語彙型往来」]には、

椿榎楸枳 「木に春はつばき、木に夏はゑのき、木に秋はひさぎ、木に冬はひみらぎ」とする。また、この原理に従って魚扁を造字すると、

鱒鰻鯰鯉 「魚に春はさはら、魚に夏はふぐ、魚に秋はさんま、魚に冬はこのしろ」

となり、このように扁を同じくして扁で意味を変えていくことが可能だからできることである。これはさらに、パロディ化した式亭三馬著『小野篁諷字尽』と云う書物の表記字である。

椿復楸仔 「人に春はうはき、人に夏はげんき、人に秋はふさぎ、人に冬はいんき、人に暮はまごつき」

とあって、これも旁は同じにして扁を替えて別の名称語を提示することが出来るという利点を応用



現況であることを認識して、今だからこそ伝えねばならないことをここに取り上げているのである。

- ① 日本人は紙の上で「天と地」を意識する。
- ② 「鉛筆」の持ち方と「シャープペンシル」の持ち方の差異が変容させていないか。
- ③ 「自制」「自省」を常に養うことに向かう。

#### 〈補注〉

※1, 丸谷才一『日本語相談』(朝日文藝文庫、一九九五年刊)に、「和歌に連体助詞ノの字の多いわけ」(112頁)という文章がある。この「問」に、「足引きの山鳥のしだりをの……」や「秋の田のかりほの庵の……」といった具合に、和歌ではくりかえし使われる「の」の字が心地よいリズムをかもし出しています。現代文で「週刊朝日の日本語相談の回答者の別荘の電話番号」などとやると、「の」を使う回数と同じなのに、ぎこちなく感じるのはなぜですか。(神奈川県・石川浩延)とあって、これに丸谷さんが回答を寄せている。ここに一部抜粋するに、

連体助詞ノは体言と体言のあひだにはいつて、①存在の場所をあらはす。「……にある」といふ気持で(例、「明石の浦」、これがノの基本ですが、これからはじまつて、いろんな使ひ方が出てきた。

②行為や生産のおこなわれる場所を示す。例、「望月の駒」。

③生産者や作者を示す。例、「鳴きわたる雁のなみだ」。

④所有する人を示す。例、「わが思ふ人の手」。

⑤所属を示す。例、「初春のはつねの今日の玉簪」。

⑥属性をあらはす。例、「忘れじの行末」。

まだほかにもいろいろ有りますし、これ以外に格助詞ノもあつた。(詳しくは『岩波古語辞典』の巻末にある、大野晋さんのお書きになつた「基本助詞解説」をお読み下さい。大野さんとわたしの、中央公論社刊『日本語で一番大事なもの』もいいでせう)※下注に、「本当のことを言ふと「基本助詞解説」は(基本助動詞解説も)簡略な書き方にすぎ、大野さんにしかわからない。『日本語で一番大事なもの』が必要なゆゑです。」「113頁(114頁参照)

#### 《課題1》

「D-BOOK (デジタル・ブック)」の世界にようこそ！。前回、講義概要に換えて「D-BOOK」について直接イタリア国の私の友人でもある一人のアーティスト Lisa Solis さんの一代物語を今年三月「D-BOOK」に編集された岡ベラさんに直接皆さん方に話しかけて貰いました。いかがでしたか？本日は、そのとき**貴方が本場に何を思い何を感じたのか、そのあるがままを文章にして表現してみてください。**岡さんはこのお話しで、皆さんに一つのテーマ課題をプレゼントしていきました。それは「人を感動させること」……。

具体的には「小説・随筆集・詩集・名言集・写真集・画集・雑誌・写真集・絵本……」などという作品素材から今後貴方自身が見つけ出す作業が待っています。一週間の時の移り変わりのなかで未だどなたからも投稿がないのが私としては至極残念な思いでもあります。その残念さが厳しい課題となつてのしからないうちに、ご自身書き上げてご投稿願います。期日は四月二十六日(日)十三時迄とします。また、先回出席できなかった方につきましては、[駒澤大学 e-Education : YesStudy](#) にログインし、「全学共通科目」のなかの「教養教育」に入っていたら、次に「実務表現(萩原)」にアクセスしてその内容をご確認願います。

書式は、A4型「縦書き」とします。直筆の場合には、原稿用紙をご利用願います。詳細につきましては本日の講義のなかでお話ししていきます。